

# 佑 啓

社会福祉法人 佑啓会 ふる里学舎  
〒290-02 市原市今富1110-1  
☎0436-36-7611  
発行者 里 見 吉 英  
編集者 三 股 金 利

## ハワイ！でなくてもよい話

古川 弘

ハワイの空はたしかに青い。海もさわやかに碧い。自然がさわやかに広がっている。人生下り坂の年令の故か、ハワイの若さ、ちょっと反語めいては、その喧騒が気にかかる気持ちで旅立つた私であつただけに、意に反しての爽快感を味合いながら、成田空港へ降りたことができた。

ここで旅行見聞記をまとめる気配がないのは、驚いている。視点の迷いがあるのか。五十余年、真珠湾の急襲（旧制中等学校時代）広島島の原爆投下、投下後の被爆影響、知覧の特効薬基地など「ハワイ」というイメージがついに私の独善で連想が走り、平和のこの世にそぐわない。

閑話休題。一方の視点。この旅で受けた心象風景も、私なりの心に深く残してくれた。

ハワイの強烈なスケッチより、この人達との永いおつきあいの私の歴史に一頁を加える心象として書き留めることにした。なによりも気楽な小市民的安らかさである。



さて、障害を持つ方達との旅は、成田空港からスタート、八時間余の地球をみつめながら……私の隣りの窓際の席に、九十九歳の利用者K・Kさんが陣取っている。私は久方ぶりの同席である。富里町の職親さん宅に若い頃からの永年勤続者で、私とも同好の志である。その後職親さんから「高令」になつてきたものの依頼により袖ヶ浦福祉センター更生園中區（加齢者棟）へ入所されたが、九十九歳の開所とともに、職親さんの近くへと、その希望により現在に至つてゐる。

彼にとつては初めての海外旅行。狭い座席で、座席修養の構線を越える航路。いずれが昼食か夕食か、とにかく食事は黙々と彼と共にした。食事の楽しみ方は、定かではないが、彼は小さな角皿に配食されているものを右から一個づつ丁寧に黙々喫食。皿までなめないまでも、残さず数皿に及ぶもの全部を腹に納めている。最後に飲みものをたしなみ、ほのかに満足の笑みが漂う。「行儀悪いね！」と私に向けられる言葉ではないかと、私の食べ残しを横目に見られた思いがした。それから旅、食事の時、彼の無表情にも、心よ

い笑顔がよみがえつてゐる。日常どここの施設にも、この流儀の持ち主がいるに違いない。食事援助を職員と共に、挑戦している御仁もいる。でも、とにかく食べる楽しみは、ニコニコがやがや楽しい食事は論を俟たない。これを自分に問いただすことを、K・Kさんから教えられた旅の一節である。



ハワイの繁華街は、やはり喧噪である。とくに日本人目当てのショップは、けばけばしいあまり上等と云えない色彩の看板が連立している。私が少年の頃、東京下町でみかけた大安売りの広告看板とチンドン屋を想像し、どうみてもスマートさに欠ける。でも、とにかく呼び込みビジネスに徹している。かえつてその気安さに引き込まれるように、楽しげな客の風情も横溢している。

私達も、ややお上りさんの興味もあつて、三三五五、お買いものに向うくことにする。やや付き添いの方が緊張。

百貨店、横文字でデパート、バザール、ショッピングセンター、そして免税店と、目を白黒させて

グルーブ思い思いの大臣気取りで徘徊したが、ドルの明示で、品物の価値を判断するのに、時間がかり、バズルゲームに似た思いに戸惑う始末である。金の計算に真剣味に感嘆するのは、障害をもつ人達の特権であることを、いみじくも発見した。これは私達の指導でも援助でもかまわないが、私達の日頃の怠慢のためかとも思つたが、ふと、私のイメージが湧いたのは、障害をもつ諸君の欲求のひとつ、ハワイのおみやげが絶対的に欲しいということである。簡単に云えば、物を欲しいということについて、最も率直に間違いない人間の性質のひとつを表現していることである。これはどんな重度の障害をもつていても同じことが云える。とすれば、物を運ぶ習慣、ものを交換する習慣をもつことの大切さによつて、物と貨幣の交換という簡単な理屈となる。その次に物の価値、貨幣の価値の問題である。この点からすると、この度の中で最も勇ましく堂々としていたのは、知的障害をもつ人であることを感じた。少し大げさであるが言葉が通じないことを苦にする普通の人以上、自ら言葉が通じないことを卑下することなく外人と表情、掛け声などでふれあつてゐる。とにかく、デパートの中を闊歩している団員の障害をもつ方達は、世界に通じる文化人のひとりであらう。勢過ぎな話とお笑いなる向きは、私達の仕事の中で「常にあたりまえのくらしを求

めて」のモットーをどう説明されるか、迷える小羊を思い出しただきたい。

佑啓会 理事長



## 夢と時間

三股 金利

橋とトンネルがつながり、またひとつ夢が現実となつた。手段が目的化し賑わいをみせている。技術の成せる夢。

年を重ね、時を浪費しながら、小さいときの夢は忘れていく。ただ眠りの中の夢だけをおぼろげに楽しむのみ。

欲しい物は簡単に手に入り、ワクワクさせる夢や期待もなまに萎んでいく。生活が惰性になりかけたとき、新聞の広告を食い入るようにつめては大切に持ち歩く寮生に気付けられる。価値観はそれぞれだが、求めているような姿。それは、スポーツの場面や、無心に紙を切る表情であつたりする。利便と効率が優先される世界ではない。

短縮され、残された時間の行方をもう一度確認しよう。夢の実現が新たな夢を追えるよう。

(指導課長)

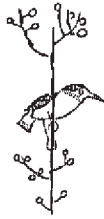
# これからの人生

妹として

鈴木 順子

兄がふる里学舎にお世話になり五年の月日が経ちます。帰省する毎、兄は園での出来事を話してくれるので園生活がとても充実している様子が伺え、先生方の細かな配慮に大変感謝しております。

私は昨年三月に短大を卒業し、地元の人福祉施設に生活相談員として働き始めました。毎日、知識不足と技量のなさを感じながら仕事をしている時、利用者の方とした表情を見ると仕事への意欲がわいてきます。入園者は明治生まれから昭和までと年齢も幅広く個性豊かな方々ばかりの中、数名精神遅滞の方もいらつしやいます。そのせいかこの頃、これから先避けては通れない両親の老後、兄の事、そして自分の将来について深く考え始めるようになりました。それに付け加え、最近「お見合い話」というものが出たのでなおさら考え始めたのではないのでしょうか。



よく知人に「お前は兄ちゃんが障害を持ってるから婿をもらえ」と言われますが、その言葉は私にとって自由を縛られ、兄の付属品であるかのような言われ方にしか感じません。兄には兄にとつて最高の生き方があるように、私自身にもあるのです。兄妹ってお互い支え合つていく関係であり、決しておんぶにだつこの関係ではないと思います。兄は私より家事をこなす人で、料理等覚えたりすればある程度自立し生活できる力を持っていると私は考えています。

お父さん、お母さん。これから先自分の老後や死後、子供の事をどのように考えていらつしやいますか。入所者の兄弟の方、自分と兄弟の人生の事でどんな考えをお持ちですか。私達兄弟はこれから先、親よりも長く付き合つていかなければなりません。

(鈴木淳史、妹)



読書女は  
ギャラリ―展示の夢を見るか

遠山 貴子

短大生だつた頃、通学の電車の中で本を読みまくつた。小学校の道徳の本から始まつて、現国、古典、漢文。果ては、テストに出題される問題文までもが私にとつては素晴らしい世界だつた様になる。徹夜で本を読んだり、一日に何冊読めるか等くだらない事に熱中したりもした。食傷気味になつて、活字を見ただけで吐き気をもよおす、それでも何故か「負けられない」と本を手取る始末。

就職して、本を読む時間は激減したが、購入量は以前より増えており、未読の本が連なつて誘つてくる。しばしば誘惑に負けて開いてしまふのは決まつて布団に入つてからや、休日。天気が良く、アウトドアにはもつてこいの口でも、否、そういう日ならば尚更小説に没頭してしまふ。推理・恋愛・ファンタジー・歴史と少しづつ首を突つ込み、何故か最後に落ち着くのは推理小説や児童書という乱読さ。

何百冊もの物語に入り込み、得たものが何もないでは情け無い。そんな事にならない様に日々またこれ読書...

活字が好きでも、それを作るとなると大違いである。思えば、機関紙に初めて関わつた五年前。昨日までは責任感もない自由気ままな生活を送つていたのに、今日からは机にかじりついて発行日を気にしている自分の環境変化に茫然となりながらも、記念すべき一号用の原稿に取りかかつていた。常に受け身の読者から、常に斬新な物を提供しなければならぬ紙面の担い手とでは静と動。自分の発想の貧困さに悩みだけが膨れ上がり、必ずくる発行日を気にしながら前号より少しでも質の良いものにしたいという苛立ち。

発行に漕ぎ着け、完成した機関紙を見る度に踊りだしたい程の満足感と充実感をいつも感じる。そして次号ではもう一歩前に、と思う。

今年度「機関紙」という枠を越え、広報委員会として新たな出発を迎えた。機関紙の形がある程度整つてきた今、次の目標は紙面以外での広報活動である。そこで今回、実行する運びになったものが、姉ヶ崎駅のコンコースにある市民ギャラリへの展示だ。普段は作品展や施設見学を媒体としてしか施設の紹介はできないが、それでは極限られた方達へのみのものになつてしまふ。これでは地域の方や、福祉に興味は

興味はあるが、関わる手段を模索されている方達へのアプローチにはならない。また、自分達の生活場面や施設の様子を一人でも多くの人に見てもらいたいという気持ちから出てきた発想でもある。

期間は平成十年二月一日〜二月二十日迄。パネルや作品も展示する予定なので、興味を持たれた方や時間のある方、また駅を利用する際にでも立ち寄つて頂ければと思う。普段は紙面上でしか伝えられない学舎の様子が、もう少し大きなインパクトでお届けできるはず。

今年は寅年。皆様のお手元に新年号の、機関紙二十七号が届く頃。コタツに入つて、雑煮でも食べながら日本を満喫。寅の出でくる本を読み、今年も元旦から変わらぬ、私自身をかみしめている。

編集後記

皆さん、どんなお正月をお過ごしでしょうか？

小学生の頃、都はるみが引退するという紅白歌合戦を見て、妙に感慨を覚えたものです。今回は、安室奈美恵が出産前最後のステージということで、五年後十年後に彼女がどうなっているのか多少の興味を持ちつつ、自分は、学舎は、どうなっているのだろつと、想像しながら新しい年を迎えています。

安藤 美和子

